

自由 1981年2月号

この一年間にソ連のアフガニスタン侵攻、日本のモスクワオリンピック・ボイコットがあり、日ソ対話の場は狭まった。会議を包む状況は、日本国民の目もソ連側の構え方も変わっている。

冷却した日ソ関係を悪くなる一方の状態にしてよいわけではない。しかし、現状打開のためには日本側としての最小限の前提、広く国民的合意を得ている事柄を率直に話し、理解し合わなければならない。それがこれからも並大抵でない根拠があることを改めてはだ感したからだ。

日ソ双方合わせて約三百人の参加者は「国際」「友好」「経済」「文化」の四つの問題別に分科会に分かれた。それらを総括して一口に、国際「悪役」、友好「ニコニコ」、経済「まじめ」、文化「ゆう然」と評した人がいる。今度の円卓会議の全体像をズバリ表現したものといえるだろう。

悪役という意味は、第一分科でそれほど白熱したやりとりが行われ、厳しい見解の対立があったということである。従来からの特定友好サークルの中で、人間交流や商売や継続発展を話し合う分科会に比べ、第一分科会はそのれではすまないからである。

「北方領土」からのソ連軍の撤兵、一九七三年の田中・ブレジネフ共同声明で「未解決の諸問題」とした認識を日ソ双方が確認すること、アフガニスタンへの軍事介入の停止——それらをこの分科会参加者の多くが強く求めた。ソ連側は強く反論してきた。

ソ連の脅威を日本国内であおり、反ソ・キヤンペーンをしているとして、日本のマスコミを十把（じゅっぱ）ひとからげに一方的に批判するソ連側。言論の自由の下に多様性のあるわが国のマスコミのイロハから説明しなければならなかった日本側。「実情を無視した日本批判や誇張された日本軍国主義批判は日ソ友好を願う国民までも反ソに押しやる結果を招いているのではないか」と具体的な事例を挙げて説明する日本側。だが、ソ連側にはソ連側の言い分と立場があり、政治・社会体制の違いからくる大きな距離がある。

潜在する日ソ間のわだかまりを一つずつ明らかにしていこうと、これほど互いに率直な言葉を連日ぶつけあった会議はこれまでそうはなかったらう。

第一分科会の緊張したふん囲気を見て、他の分科会の一部から「友好の場なのに、争うようなことはやめてもらいたい」といった見

当違いの非難の声が出た。

ニコニコと仲の良い話だけで、友好の輪は国民的規模で広がるわけではない。まず言にくいことを互いに率直に言い合う。そしてその傷を互いにいやす道を忍耐強く求めてゆく。そのための「悪役」というのが、第一分科会出席者の共通した立場であった。

最終日のしめくり総会で、第一分科会の模様を報告したソ連側のG・キム・ソ連科学アカデミー東洋学研究所副所長の「討論はきわめて腹藏のないもので、時に情熱的でした。多くの問題について意見の一致を見なかった。だが共通の問題について認識を深めた」と述べている。意見の一致点を並べた共同コミュニケより私には印象に残るものだった。率直な話し合いの成果がソ連側に理解されたものと期待したい。

この円卓会議の開幕の模様をソ連国内ではブラウダが二日続きで、またテレビも夜のニュース番組の最後に簡単に報じた。ところが、共同コミュニケが出たあとの二十日ブラウダは国際面でオフチンニコフ評論員の論文を大きく載せた。狭いホテルの会議室にたくさんソ連側発言者が詰めかけ、文字通り体を寄せ合いながら真剣に話し合おうとした姿

のであるから、互いにイニシアチブを期待するのはなく、積極的に協議に入るべきである。ソ連側は別の機会に、ソ連がグロムイコ外相の訪日についてなんらの回答も約束もしていないのに、日本政府が一方的に訪日を拒否し、ソ連の面子を傷つけたと不満をもらしていたことがある。このような相手の面子を傷つけ合いが、わが国の外交に益するとは考えられないので、どういうルートで行うかは別として早急に関係改善のための協議を開始すべきであらう。

アルヒーポフ第一副首相が、私たちに提唱した、日ソ経済関係の修復についての意見にも、ソ連側の対日経済交流の活発化についての意向がうかがわれた。ア副首相はここの一週間の間、日本が対ソ協議のためのソ連代表を受け入れたことを高く評価するとともに、第十二次経済五カ年計画が開始される一九八一年こそ、今後五年間にわたる日ソ経済協力にとって重要な年であると強調し、本問題についての日本側の取り組みを私達に促進した。

両首脳は、日本側から提唱した今後の日ソ政治関係の基礎を、一九五六年の（日ソ共同宣言）に置くべきであるとのイズベスチヤ紙の論評を歓迎し、それに対するソ連側の追加

発言を求めるとの発言に、直接答えはしなかったが、対話全体は極めて友好的であり、ソ連首脳の日ソ関係改善への意志は極めて強いものと感じられた。

今回の円卓会議でもう一つ特筆すべきことは、確認されたコミュニケのなかで、日ソ政治関係を他の分野に及ぼさないという項目が含まれたが、その一つの事例が、名古屋オリンピック問題で、ソ連側が早々に示されたことである。

私は二十一日、ソ連関係会議付属体育、スポーツ委員会、プロフ議長（閣僚）と会見し

た際、かねてから愛知県、および名古屋市中から要請をうけ、私が申し入れを行っていた、名古屋オリンピックへのソ連の支持について、完全な支持を表現した。ソ連が世界スポーツ界に占める大きな地位からおして、一九八八年の名古屋オリンピック開催の見通しはきわめて明るいものになった。今後、スポーツ交流だけではなく、文化交流や、学術交流について、両国間の相互理解を促進する活動を促進してゆかねばと考えている。それも円卓会議の一つの成果に数えてよいだろう。

（毎日新聞 80・12・1）

友好の道開く「悪役」
☆率直な相互批判今こそ

田中 豊蔵
朝日新聞・論説委員

「日ソ円卓会議」でモスクワにきた。昨年の東京での会議に続く二回目の民間交流の舞台だが、この会議への参加も、モスクワ訪問も、私にとっては初めてのことだった。

モスクワ・オリンピック前に建てられたコ

スモス・ホテルでの三日間を終え、「ひどく疲れた」というのが率直な感想だ。

第一分科会の「国際情勢と日ソ関係」に参加した討論者に共通するものだったのでなからうか。

勢の中にも、ソ連側に日本に劣らず日ソ関係の改善の糸口を見いだしたいとする意欲がみられた。

今度の円卓会議が緊張緩和と平和秩序建設のための日ソ関係作りの貴重な足場となり、政府間レベルの交渉の糸口になるかどうか、それはまだまったくわからない。

しかし、双方が建前だけを繰り返して、われわれが「ソ連の壁は厚い」とあきらめては日中関係の改善にはならない。最終日の討論で中

「不信」実感 日ソ円卓会議

☆「北方領土」手がかりなし



森本良男

読売新聞・論説委員

冷え切った日ソ関係を民間レベルで打開するための第二回日ソ円卓会議は、十八日から二十日まで、モスクワで開かれた。日本側ジャーナリスト代表の一員として会議に参加した読売新聞社・森本良男論説委員は、討論を通じて明らかになった、日ソ間の考え方の差について、以下の報告を送って来た。

嶋嶺雄東京外語大教授が強調したように「日ソ関係が悪くなるのを傍観するのはお互いに愚かなこと」である。対話を積み重ねる中で、将来いつ相互信頼の芽が育つかもわからない。そのために必要なのは相互に過度の被害者意識、過度の相互不信をぬぐう努力を第一歩からはじめなければならぬだろう。像のゆがみをお互いにできる限り訂正していく努力を続けていかなければならぬことをつくづく考えた。(朝日新聞 80・11・22)

戦後最低の冷え込みといわれる日ソ関係だが、わずかながら緩み始めているようだ。しかし、円卓会議での論議を見ると、日ソ関係には依然、厳しいコミュニケーションギャップが横たわっており、両国間の関係改善にはなお複雑で難しい問題が待ち構えているようだ。

会議のソ連側関係者は、日本側出席者にこういった。「なぜ、あなた方はアフガニスタン問題、領土問題など過去の問題ばかり持ち出すのですか」

「なぜ、あなた方は日ソ間の不一致点をかりを取り上げるのですか」

「これでは日ソ友好の可能性を小さくするだけです」

これは、第一分科会「国際情勢と日ソ関係」で、日本側出席者がアフガニスタン問題、ソ連の軍事力強化、北方領土問題などを正面から取り上げて、討論を求めたことを非難する言葉である。この非難は、ソ連にとって都合のよくない問題の討議は避けたいという気持ちからきているのであるが、それとともに、「ここには「友好」ということに対する考え方の違いがあるように思えた。」

つまり、友好とは、相手を批判せず、過去のことは水に流して「まあまあ主義」でやっていたころという、意外に日本的？ 発想をソ連は持っている。これは、双方が遠慮せず、率直に意見を交換して相互の理解を深める、というディスカッションを日ソ間に成立させることの難しさを示している。

第一分科会の具体的な討議内容を見ると、

ソ連側から、従来の見解、立場を大きく超える意見は出されなかった。アフガニスタン問題については、「外国からの干渉がある限り、ソ連軍は撤退しない」という基本的立場はまったく変わっていない。また、北方領土問題についても「解決済み」の極めて固い態度が再三表明された。北方領土問題のよ

着させる。そして第三段階として平和条約締結の問題を注意深く討議するとなっている。しかし、この方式でも提案者自身が「領土問題は解決済み」といっており、どの段階においても北方領土問題が取り上げられる可能性はまったく認められていない。

印象的だったのは、日ソ間で「二つの脅威論」が交わされたことだった。日本側が極東でのソ連の軍事力強化を批判したのに対し、ソ連側はそれを偽りのソ連脅威論と否定し、逆に日本の軍事力強化と「日・米・中の三国同盟」がソ連にとって脅威であると主張した。これについて、日本側は、そうした三国同盟の可能性はなく、ソ連が米中、日中関係の改善を過大に評価し、過敏に反応している

と指摘した。つまり、日ソ間では、互いに相手に対する実像と虚像が入り混り、それが増幅し合っており、心理的なギャップが生み出され、不信感が強まることになっている。双方の過度の被害者意識が、過度の相互不信を生んでいるのである。

今回の円卓会議は、日ソ関係改善の必要性では一致したが、その具体的な方策については、双方の模索が必ずしも重なり合わなかった。第一分科会の閉会を前に、ソ連側代表が「何一つ統一見解に達しなかったが、相互理解は深まった」と、冗談めかして言っていたが、むしろこれこそが、今回の大きな成果といえてよい。(読売新聞 80・11・22)

五年ぶりのモスクワ

☆日ソ円卓会議に出席して



谷畑良三

東京タイムズ・論説主幹

また、日ソ改善の方策として、ソ連側は三段階方式を打ち出したが、何ら新味のあるものではなかった。これは、第一段階として、①両国間の不一致点を拡大するのではなく縮小し、政治面の不一致を経済、科学、人物交流など他の分野に広げない②外部からの圧力に屈せず政策決定をする③現実で成立している国際情勢を踏まえ、双方とも非友好的なふん

モスクワで開かれた第二回日ソ円卓会議にジャーナリスト代表として参加、三日間にお

たってソ連側代表の国際問題研究者や日ソ問題専門家と討論してきた。わずか八日間の滞

屈気を促す措置は控える——との三原則を認める。第二段階として、善隣友好条約、ないし日本側が主張する条約のないし協定を結び、これまでの日ソ関係が達成した成果を定